

第43回

全国中学生人権作文コンテスト 三重県大会入賞作文集



人権イメージキャラクター
人KENまもる君



人権イメージキャラクター
人KENあゆみちゃん

津地方法務局・三重県人権擁護委員連合会

世界人権宣言

第1条 すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。

世界人権宣言は、1948年（昭和23年）12月10日、第3回国連総会において採択されたものであり、人権及び基本的自由を遵守し確保するために、すべての人民とすべての国が達成すべき共通の目標ないし基準を定めたものです。

第四十二回

全国中学生人権作文コンテスト
—三重県大会入賞作文集—

津地方法務局
三重県人権擁護委員連合会

は し が き

法務省と全国人権擁護委員連合会は、次代を担う中学生の皆さんが、日常の家庭生活や学校生活等の中で得た体験に基づく作文を書くことを通して、人権尊重の大切さや基本的人権についての理解を深め、豊かな人権感覚を身につけることを目的として、昭和五六年度から毎年「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しております。

これを受け、津地方法務局と三重県人権擁護委員連合会では、三重県教育委員会、中日新聞社、NHK津放送局、三重テレビ放送、伊勢新聞社の御後援を得て、四十三回目となる「全国中学生人権作文コンテスト三重県大会」を実施したところ、県内の一四九校から三万三八九〇編に上る作品が寄せられました。

応募された作品の内容は、「いじめを含む子どもに関する問題」を始めとして、「障がいのある人に関する問題」、「外国人の人権問題」、「戦争と平和」、「性的マイノリティ」など多岐にわたっており、日々の学校生活や家庭の中などで起こっている身近な出来事を注意深く捉えたものや、人権問題を解決し、お互いがより快適に生活するにはどうしたらよいかを深く考えたものなど、いずれの作品も中学生らしい感性に富み、純粋な感覚で人権問題を捉えたものばかりでした。

また、自分は今何ができるのかについて悩み、真剣に考え、そして知識や経験だけに頼らず、自分なりの答えを導き出していくその過程は、とても力強く、深く感銘を受けました。

この作文集は、「三重県大会」において最優秀賞及び優秀賞を受賞した作文を収録し紹介するものです。一人でも多くの方々に御愛読いただき、基本的人権を尊重する輪が更に大きく広がるよう願っております。

終わりに、この人権作文コンテストの実施に当たり、貴重な時間を費やし熱心に作品を書かれた中学生の皆さんを始め、御指導いただいた先生方、保護者の皆様、御協力を賜りました学校、各市町教育委員会、また、御支援をいただきました関係各方面の方々に心から感謝申し上げます。

令和七年一月

津 地 方 法 務 局 長 坂 佳 恭
三重県人権擁護委員連合会会長 上 野 尚 子

目次

掲載頁

最優秀賞（三編）

（津地方法務局長賞）

父の旅路……………津市立東橋内中学校二年 三行 穂乃芽…………… 1

（三重県人権擁護委員会連合会会長賞）

叔母と暮らして感じたこと……………四日市市立内部中学校一年 今井 彩葉…………… 5

（三重県教育委員会教育長賞）

七夕の短冊……………津市立東橋内中学校二年 キット アンジェリナ…………… 9

優秀賞（八編）

（中日新聞社賞）

新時代を、今……………津市立久居東中学校一年 濱口 史緒…………… 13

母の思いを知って……………伊賀市立柘植中学校三年 藤島 真綸…………… 17

(NHK津放送局長賞)

プロフィールの記入欄に……………津市立橋北中学校三年 横田 莉子 …… 21

兄らしく、私らしく……………朝日町立朝日中学校二年 後藤 愛 依 …… 25

(三重テレビ放送賞)

認知症のおじいちゃん……………四日市市立山手中学校二年 石川 凜 …… 29

だれもが安心して過ごせる世の中にするために……………

……………津市立久居東中学校一年 稲垣 舞 …… 33

(伊勢新聞社賞)

おじさんから学んだ事……………伊勢市立城田中学校一年 念 佛 幸志郎 …… 37

0歳0カ月0日……………志摩市立磯部中学校二年 坂本 逢 太 …… 41

奨励賞 (九編の作品一覽)

写真集……………46 45

*原文に忠実を原則にしましたが、誤字・脱字等については最小限の訂正をさせていただいたものもありますのでご了承ください。

○三重県大会 最優秀賞（津地方法務局長賞）

父の旅路

津市立東橋内中学校 二年

三行 穂乃芽

「死なんでよかったな、お父さん。なんでかって？だって、私が生まれてないやん。」これは、父が講演の中で「死のうと試みたことがあったが、死にきれなかった」と話したとき、私が心の中で感じた言葉です。中学一年生の人権学習の時間に、私の父が講師として招かれました。だけれども過ごしやすい社会を創るために、父が選ばれたのです。

私の父は「ミオパチー」という病気を患っています。その中でも、「遠位型ミオパチー」というタイプで、筋肉が脂肪に変わり、体の中心から遠い部分が徐々に動かせなくなる病気です。一人でできることが少しずつ減り、他者の助けなしには生活が営めなくなり、そのため、父は障がい者と分類されます。父の生活は車椅子に依存しており、動かせるのは顔と指先だけです。

そんな父は、明るくユーモアにあふれ、私たち家族にとって誇りの存在です。しかし、病気は父の体を蝕み、日常の当たり前を次々に奪っていきました。私は小さい頃からその現実を受け入れてきましたが、出会い学習で父の話を聞いたとき、初めて父の苦しみと葛藤に直面しました。

父が中学校で講演を行うと聞いたとき、「お父さんが学校に来るなんて恥ずかしくないの？」と友達に冷やかされましたが、私は全然気になりませんでした。むしろ、父がどのように障がいと向き合ってきたのか、内面を知りたい機会になると思っただけです。講演は、父が障がいを発症した時の話から始まりました。十七年前、仕事を続けることができなくなり、病院で「現代の医療では治療できない」と告げられました。それでも「何年かしたら薬ができるだろう」と淡い期待を抱いていましたが、その期待は裏切られ、薬の開発は進まず、体は徐々に動かなくなっていきました。この病気は、全国に患者が四百人ほどしかおらず、製薬会社にとって研究開発のコストが採算に合わないことが原因でした。また、政府はより多くの患者がいる難病に補助金を当てたいという現実があるのです。

父は「できたことができなくなることで、何をやるにも人の手を借りなければならぬことに耐えられなかった。このままでは『自分で自分を殺めるしかない』と思ったが、そんな力すら残っていないかった」と振り返りました。普段は明るい父の口から、そんなことを聞くとは思

ませんでした。その話を聞いたとき、私は心の底から「父が生きていてくれて本当に良かった」と思いました。もし父が命を絶つ選択をしていたら、私はここに存在していなかったのです。その絶望の中で、父を救ったのは母でした。父は、できなくなっていく自分に強くこだわりの、専用のトイレを使おうともしませんでした。そんな父に母は「何のためにトイレつくったん。あるのに使わないなんてもつたないやん。」と言いました。この言葉に、父は救われたように、とても気分が楽になったと言います。動けていたころの自分と、動けなくなった自分との間に葛藤し、苦しんでいた父の姿がよく分かりました。父がその話をする姿を見て、母は当時を思い出し、涙を流していました。

現在、父は「NPO法人 ふてい・ぼぬーる」という団体に所属しています。この法人は、難病患者や障がい者、その家族を支援し、地域社会の理解向上や医療発展に寄与することを目的としています。父は動ける指を使い、スマホでデジタルイラストを描いています。その絵が地域のお祭りのポスターに選ばれ、市内各所に掲示され、新聞にも掲載されました。父はそのとき、「見た人が元気になってくれたら嬉しいし、苦しいことがあっても希望を捨てずに頑張ろうという気持ちになってもらえたら、このポスターを描いた意味があります」と語りました。

私は、家族で支え合うことの大切さを改めて感じました。父の存在が、私たち家族を強く結びつけてくれています。そして、その絆が地域社会とのつながりを深める原動力になっています。

す。父と母は「ぷてい・ぼぬーる」を通じて、地域に暮らす障がい者の相談に乗り、悩みや苦しみを少しでも軽減できるようアドバイスしています。私も父の展示会を手伝い、来場者が障がいについて伝えていきます。障がいとは、人の中にあるものではなく、社会の中にあるものです。社会が変われば、障がい者も健常者と同じように自由に生きることができるよう。私の中学校にもエレベーターが設置され、父は「これで授業参観にも気軽に参加できる」と喜んでいました。こうした変化は小さな一歩かもしれませんが、障がい者が健常者と同じように社会生活を送れるようになるための大切な一歩です。

私は、皆さんと一緒に、誰もが過ごしやすい社会を作り上げていきたいと強く思います。私の父がそうであったように、困難に直面しても希望を捨てずに生きていくことができる社会を築いていきましょう。

○三重県大会 最優秀賞（三重県人権擁護委員連合会会長賞）

叔母と暮らして感じたこと

四日市市立内部中学校 一年

今井彩葉

「こんにちは。」

祖父母の家に今日もやってきた。

「あがつといで。」

奥から祖母の声が聞こえる。私は、靴を脱ぎ真っ先にいつもの部屋に入っていく。ヒューヒューと鳴る医療機械の音を聞きながら、サヨさんの右側に回り、声をかける。

「サヨさん、来たよ。」

パツと目が合う。けれど返事はない。その代わり全身に力をぎゅっと入れて、一秒程してからニカツと笑う。私が来たことを喜んでくれたようだ。これが、私とサヨさんの挨拶だ。

私がサヨさんと呼ぶ叔母は、生まれつき脳に障がいがあり、寝たきりで言葉を話すことがで

きない。重度障がい者と呼ばれている。家族や周囲から医療的ケアなど様々なサポートを受けながら暮らしている。障がいのため笑う時も過度の力が入り、少々時間が掛かる。だから数秒待たないと、叔母が挨拶を返してくれた事を見逃してしまう。側わんで左を向くのが困難なため、話をする時や遊ぶ時は私が右に回り込む。誰かに教わったわけではない。自然とそうなった。叔母はよく笑うし、好きな事も色々あり、結構楽しそうである。私にも「一緒に折り紙しよう!」と、視線や表情、わずかに動く身体でアピールしてくる。そんな叔母とのやりとりは私のごく当たり前の日常である。

しかし、一歩外に出ると叔母は、異質な目でみられる事がある。例えば、町の病院に行き叔母の車椅子を押していると、周りからのジロジロとした視線を感じる。反対に気まずそうに目を逸らされることもある。そんな時、私の心はどんどんしょんぼりしていく。迷惑をかけているのかと思い、焦ってしまふ。仲間外れにされたような疎外感から逃げ出したくなる。私が一人で歩いている時には感じない独特の視線と周囲との距離。それ迄どんなに楽しくても、一瞬で気持ち沈む。まるで静かな水面に、次々と石を投げ入れられたかのように。これは叔母と出かける度に感じる心の傷である。待合室では人がいない隅の方に母たちとポツンと座る。母は

「昔より随分良くなったように感じるけど、まだまだやなあ。」

と言う。昔は戻ってまで見に来る人、「かわいそう」と口にしながらすれ違う人などもいたそう
だ。母や祖父母達が、そんな心の傷を負っていた事を初めて知った。悔しい。それでも世の中
は良い方向に変化してきていると聞き、嬉しい。そしてもつと良くなって欲しいと思う。

どうしたらこの得体の知れない痛みはなくなるのだろうか。

考えてみると、今の周囲の人は意地悪な気持ちでそうしているのではないのかと気
付いた。なぜなら私も自分と異なる人に無意識に不安を抱き、距離を置いてしまう事があるか
らだ。それは決して悪意からではない。よく知らないからだ。反対に、私が叔母を自然に感じ
るのは、生まれた時から一緒にいてよく知っているから。つまりそこにあるのは「知らない」
が作り出す心の障壁だ。今まで関わったことがないから歪な距離を取ってしまう。それならば、
まずは「知る」ことが大切なのではないだろうか。

叔母は平日、町の福祉施設に通っている。利用者の多くは、叔母と同じ様に言葉を話せず、表
情や目の動きで気持ちを表す。それでもスタッフは利用者一人一人と個々の方法で自然にコミュ
ニケーションをとっている。私は幼少の頃から、この心の通い合う温かな雰囲気が好きだ。し
かし、殆どのスタッフががこの施設で働くまで障がい者と接した経験がないと知り、驚いた事が
あった。

「最初は どう接しているのか分からず不安だった。でも、一緒に過ごす間にみんなのことが大

好きになった。」

と、スタッフは口を揃えて言う。共に過ごし知る事は、やはりとても大切なことなのだ。

今も多くの人が無自覚に何かに偏見を持っているのではないだろうか。自分に限って差別や偏見はないと思っている人も少なくないだろう。自分の事として意識するのは容易な事ではない。しかし、一人一人が自分を見つめ直し、偏見や無知に気付く努力をしなくては、誰かの心の傷はなくならない。「知らない」は差別や偏見を作り出す。私も今までの自分を反省し、まず色々な人を「知る」ことから始めようと思う。本やインターネットを通じてその世界を学び、積極的に交流して視野を広げ、気持ちを受け止めていきたい。

様々な人がこの社会の中で、今日も暮らしている。お互いを知り、一緒に笑い、多様な人がいる事が普通に想定された社会。叔母のような障がい者が特別な目で見られることなく、気軽に町の中に出かけられる社会。それは、皆が安心して暮らせる誰にとっても優しい社会なのではないだろうか。私はそんな社会を作れる一人になっていきたい。

七夕の短冊

津市立東橋内中学校 二年

キット アンジェリナ

「お前なんか死ね。お前の家族なんか消えろ。ウクライナなんか消えてしまえ。」この言葉は私が小学校六年生の時に言われた言葉だ。私はこの言葉を言われたとき、茫然として何も言い返せなかった。そして、シヨックで涙が溢れて止まらなかった。集会所に迎えに来た母も、この出来事を知って泣いていた。それは、私たち家族は戦争が始まってからずっと不安と戦っていたからだ。

私の母はウクライナ出身だ。ロシアとウクライナの戦争が始まったのは、私が小学校五年生の時である。私は祖国で戦争が始まったことにとっても驚いた。戦争が始まってからも、時々叔父とは電話で話すことができていた。母は必死に叔父たちに「死んだらダメだよ」と言っていた。叔父たちも「大丈夫。死なないよ」と返していた。また、叔父たちはテレビ電話でウクラ

イナのきれいな景色を見せてくれることもあった。それから私たちは、祖国での戦争を心配しながらも、日本で平穏な生活をしていた。

二〇二三年十二月二十五日、私にとってその日は忘れられない日になった。いつも通り、リビングで六歳の弟はテレビを見て、私は宿題をしていた。母は料理をしていた。そこへ一本の電話が入った。その瞬間、母は泣き叫んだ。狂ったように泣いていた。私は今まで見たことがない姿にどうしてよいのかわからなかった。心配になり駆け寄ると「今は話かけないで！」と強く言い放ち、ずっと泣いていた。今は落ち着くのを待とうと思ひ、弟と待った。しばらくしてから、母が話をしてくれた。その内容は「ママの弟が戦争で亡くなった」だった。私はあまりにもショックで、泣き崩れてしまい、朝まで泣き続けた。自分の気持ちを落ち着かせることは難しかった。それでも、私は意を決し母の元に行き、たくさん話をした。その時感じたことは「なぜ戦争があるの？」ということだった。こんな身近で大切な人が亡くなるとは思ってもいなかった。

叔父の戦死で強く思ったことがある。それは、戦争はこの世の中で一番ひどく醜い「人権侵害」の一つであるということ。人を殺めることは犯罪である。しかし、戦争では人を殺めても罪にならない。むしろ、人が大勢亡くなれば喜ぶ人がたくさんいる。おかしい。戦地ではやらなければやられる。生命尊重を唱う国連憲章とは矛盾している。人には公共の利益に反しない

限り、安心安全に暮らすことができず権利がある。なのに、兵士も住民も毎日生命の危機に怯えて暮らしている。しかもこれが二年以上続いているのである。これを人権侵害と呼ばずして、何になるだろう。

次の日学校から帰宅すると、母はずっと暗い表情で、弟の写真を見つめながら、「戦争は大嫌い」と言っていた。また、「祖国を守ってくれた弟を誇りに思っている」とも言っていた。そしてまだ戦地にいる、もう一人の弟のことをとても心配していた。私が亡くなった叔父と電話で話したのは亡くなる一週間前のことだ。短い電話だったが「気を付けてね。またね」と話したのが最後の会話になってしまった。でももう話をするには叶わない。私は今年のクリスマスが怖い。それは心から楽しめないし、また母が泣くのではないかと心配だからだ。みんなにとっては楽しい日かもしれないが、私は十二月二十三日と二十五日が嫌いになった。二十三日は叔父が亡くなった日、二十五日は叔父が亡くなったことを知った日だ。私は、今年も泣いてしまおうと思う。でも、私は母を支えたいと思っている。

中一の三学期に学年集会で、友だちの前で自分の叔父が亡くなった話をした。話すこととはとても緊張したし、みんなにどう思われるか怖かったが勇気を振りしぼり話をした。みんな顔を上げて真剣に話を聞いてくれていた。また、涙を流して聞いてくれる友だちもいた。そのとき、「私は一人ではない、仲間がいる」と思い、心強かった。今まで自分の気持ちを人に伝えること

は苦手で、正直に打ち明けることはできなかった。でも、この仲間たちなら、私のもやもやした気持ちを受け止めてくれると信じている。

ウクライナについて今まであまり皆の前では話していなかったが、二年生になってからは発表できるようになってきた。それは自分の母国を知ってもらいたいという気持ちと、聞いてもらえるという安心感からだ。ウクライナはとてもいい国だ。そして青い空と黄色いひまわり畑が広がる美しい国だ。そして、本来ウクライナの女性はよく笑う。私もよく笑顔を褒めてもらえる。私の家族もよく笑う。

今年の七夕の短冊に「ウクライナの戦争が終わりますように。平和が訪れますように」と書いた。私の願いが一日も早く叶うことを、心から祈っている。私はいつか大好きなウクライナに行き、自分の目で美しい自然をみたいと思っている。そしてウクライナにいる家族達に会って、皆の笑顔を見ながら、家族団らんの時間を過ごしたい。

新時代を、今。

津市立久居東中学校 一年

濱 口 史 緒

「そうなんだ・・・。」

何度もかけられたこの言葉。どのような感情で言っているのかはわからない。でも、この言葉を聞いたたび、なんだか胸が締め付けられるような気がした。

自閉症と知的障害がある私の弟。なかなか物事が考えられず、思いがけない行動をしたり、自分のことを伝えられなかったりする。正直そのことを知った時は、不安になった。この先弟はどうなってしまうのだろうか。しかし、だからこそ弟を守りたいと思ったし、そばにいようと思っただ。

毎日大変、でも楽しい私の日常を誰かに知ってもらいたくなくなった。その時に、弟の発達障害のことを友達に伝えた。しかし反応は、

「ああ・・・。」

という感じだった。困っている雰囲気、同時に「かわいそう。」という心の声も聞こえてくるようだった。これを何度か体験した。

小学六年生の時、自分の紹介動画を作ることになり、自慢できるようなことがあるかなと考えた。その時に考えられたのは、弟の話していることがわかるということ。うまく気持ちを伝えられない弟の言葉がわかるのは、とても誇らしいことだった。しかし、タブレットに打ちこんでいたら、なんだか怖くなった。また、周りに何かを言われてしまうのではないかと。弟はきつといい思いをしないだろう。私は慌ててその文を消した。私は、弟を守るんだから。結局弟のことは伝えずに自己紹介は終わった。今考えると、自分自身を守るためにも伝えなかったという理由もあったと思う。

そして、今年、弟の障害の重さが「重度」だということが判明した。とても驚いた。でも、特に悲しいとは思わなかった。だって、それが弟の個性であり、よさでもあるから。そして、まだ弟のことを伝えたことのない友達に伝えてみた。しかし、やはり予想通り

「かわいそう。」

という反応が返ってきた。私は、小学生の時から色々考えてきて、「かわいそう」は違うんじゃないかと気づけた。だからこそ、友達の言葉を訂正できた。

そもそも「かわいそう」という言葉は、一体どんな感情から出てくるのだろう。何を基準に決めているのだろう。そう考えてみると、「自分基準」という言葉が頭に浮かんだ。自分とは違うという感情から自分の「当たり前」が生まれる。そして、その基準から正しい、おかしいを自然と判断してしまっているのではないか。人権学習でも学んだ。「九割の人が、一割の人を取り残していく。」自分の中の「当たり前」を人に押し付けてしまっているのではないだろうか。

ある物語を思い出した。みなさんは『はだかの王様』という物語をご存知だろうか。ある日、王様のもとに仕立て屋がやってきて、愚か者には見えない服を高額で売った。しかし、仕立て屋の正体は詐欺師で、本当は布も無いのに、服を作っているふりをした。だが、愚か者だと思われたくない人々は、みんな見えるふりをする。すると、町の子供が、

「服を着ていない。」

と叫び、人々は本音を表した・・・。

人間というものは、一人を怖がったりする。そこから、どうしても周りに合わせてしまい、流される。そのうちに、社会の「当たり前」が作られて、生き苦しい世の中が出来上がってしまった。

こう考えている私だって、完璧な人間ではない。色んなことに流され、自分の意見がなかなか言えない。こんな自分を変えたいと本気で考えているが、そう簡単にできるとは思えない。

でも、弟は自閉症と知的障害になりたくてなっているわけじゃないし、一人の人間として自分らしく生きている。そんな弟が私は大好きだし、これからもずっとずっと守っていききたい。かわいそうなんかじゃない!!しかし、社会の理解はまだ浅く、障害はかわいそうなものだと思われてしまっている。自分基準で「当たり前」が作られ、どんどん苦しみへとつながっていく。そんな世の中は嫌だ。この世の中を変えたい。みんなが認められる社会でありたい。みんなが笑顔で過ごせる世界を協力してつくりたい。これが私の心の中の叫びだ。私も『はだかの王様』に出てくる子供のように、流されるばかりではなく、自分の意見をはっきり言える人間になりたい。

今回は、弟と私のことを話した。だが世界には、辛い思いをしている人が数え切れないほどいると思う。自分基準の当たり前、決め付けから苦しんでいる人を何度も見たことがある。そのような人達も含め、すべての人が笑顔で毎日を過ごせる世界を「今」つくらないか。そのためには、まず自分が変わらなければならない。自分の考えを、今一度考えてみてほしい。あなたのその考えが、時代を進化させ、新たな世界をつくるかもしれない。

母の思いを知って

伊賀市立柘植中学校 三年

藤 島 真 綸

私は小学五年生の地区学習会で部落差別について初めて知りました。当初は昔にあった遠い問題だと思っていました。しかし祖父母や母親、クラスメイトが被差別部落出身であることを知りました。そこから自分の近くに差別があるのでないかと感じ、部落差別をなくすために学校や地区学習会等で学んできました。去年「部落問題を考える中学生の集い」に参加し、「話しやすい雰囲気とはこのことなんだな」と感じました。私の意見をしっかりと聞いて受け止めてくれる場だったからです。そんな雰囲気を今度は自分から作り、意見を伝えていきたいと考え、「部落問題を考える中学生の集い」の実行委員になろうと決意しました。それに加えて実行委員になったのには、「母の思いを知る」という目的があります。今まで母と部落問題のことについて話したのは、小学校六年生の時の一度だけでした。今の私だからこそ話してくれることもあ

るだろうと思っていました。「自分が聴くことで母を傷つけてしまうかもしれない」という怖さがあり、母と話をすることを逃げてきた自分がいました。そのため実行委員になって、母と話をしようと決意しました。

初めての実行委員会で、私は自分の母が被差別部落出身だと伝えました。それは、実行委員の部落問題に対して考える姿勢から「差別をなくしたい」という強い思いが伝わってきたからです。さらに、母と部落問題の話をしたけれど、怖くてまだ話ができていることを伝えました。少し緊張したもののしつかりと伝えることができました。しかし、その初回の実行委員会では、私が伝えたことに対して、他の実行委員からの言葉はありませんでした。「伝わっているかな」「受け止めてくれたのかな」と不安になりました。

それから約一か月後に、二回目の実行委員会がありました。そこで実行委員の中の一人が前回の私の話に対して、

「私の父も部落出身です。自分はこのことを言う時に怖さを感じたことはないけど、怖さがあるという時点で、そう思わせている社会がおかしい。」

と返してくれました。私は母のことを伝える時に「受け止めてくれるかな」という怖さがありました。けれども、そう思っていたことが当たり前ではなかったことに、この言葉で気づかされました。「怖い」という感情があるということは、まだ差別が残っているんだなど気づきまし

た。また、私が母と部落問題について話せていないことについて、

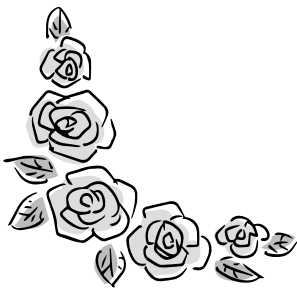
「僕は父と話して父の思いを知れた。話した方がいいと思う。」

と言ってくれました。背中を押された気持ちとなり、「夏休み中に話そう」と決めました。なかなか勇気が出ず、夏休みも終わりに近づいた日に、「今日こそ母と話そう」と決心しました。そして夜に母と話しました。母は、部落出身の祖父が地区全体を良くしようと思別をなくすために運動してくれたこと、祖父たちが運動してくれたから今、私たちが安心してすごしているのだということを、伝えてくれました。私は、母の話聞きながら、自分の生まれ育ったところを誇りに思っ今も生きているんだなと感じました。さらに、祖父の話聞くまでは、部落差別は時代とともに減ってきたのかと思っいたところがあつたけれど、祖父たちの運動があつたからこそ、差別が減り、今の自分は祖父たちに守られているのだと気づきました。

そして母は、私に「人に差別をするような人にはなつてほしくない」と伝えてくれました。そのときに、実行委員の話の中でLGBTQの話が出たときのことを思い出しました。男女で結婚することが当たり前だという考えがまだ自分の中に残っていると気づき、固定概念を外していかないと感じました。差別をなくしていく上で周りのことばかりを考えるのではなく、自分の言動で傷つけることがないように、常に自分を振り返つていこうと実行委員会での話し合いや母の話から感じました。母と話をして、母は部落差別を受けるかもしれないと

いう怖さや理不尽さを感じているからこそ、私に「差別をするような人になってほしくない」と言ってくれたのではないかと思っています。だからこそ、小さいころから地区学習会に行かせてくれ、たくさん人権について学べる機会を与えてくれたのかなと思います。

昨年の柘植中学校の実行委員の先輩が、「自分の弟や妹が部落差別で苦しまないように自分が伝えていく」と言っていて、「すごいな」と思うとともに、自分はそこまで思っていないなど感じていました。でも、母に話を聞き、祖父たちが自分を守ってくれていることを感じ、私も、これからの世代が部落差別で苦しむことのないよう、学び続け、自分の考えを伝えていきたいです。そして、集いの実行委員たちのように、差別をなくすなかまをつくっていきます。



○三重県大会 優秀賞（NHK津放送局長賞）

プロフィールの記入欄に

津市立橋北中学校 三年

横 田 莉 子

私は耳が悪いです。難聴のように声や音すら聞こえないわけではなく、声や音ははっきり聞こえているけれど聞きとれない、内容を理解できない「APD（聴覚情報処理障害）」という症状があります。

私が友だちや先生との会話、授業の聞き取りを困難に感じはじめたのは中学生になってからでした。話をしていると何か言っているけど何を言っているんだろうと感じることが多くなりました。友だちと会話をしていると、

「○○○、○○○？」

「なんて？」

「○○○、○○○？」

「ごめん、もっかい言ってる？」

「やっぱいいわ。」

いつもいつも聞きかえして、また聞きかえして最終的に諦められることをくり返しています。部活中でも同じです。

「次は〇〇〇。」

「先生いまなんて言ってる？」

「四対四だって。」

近くにいる子に教えてもらうことがほとんどですが試合中になると、ベンチからのコーチと先生の言っていることは全く聞こえません。とりあえず理解したフリはしますが、指示が分かってないので怒られてしまいます。いつものことなので迷惑をかけていると思うし、本当に申し訳ない気持ちでいっぱい自分で自分を責めて泣くこともありました。嫌われるのが怖くて、でもどれだけ頑張ってもダメで私の気持ちを理解してくれる人がいなかったの、とても寂しかったです。同じ状況で苦しい思いをしている人がいないかとネットで調べてみると、「APD」という言葉がでてきました。少し安心しました。分かってくれる人を見つけられた気がしました。私はお母さんに自分のことを伝えて病院に行かせてもらいました。たくさん検査を受け、自分が「APD」であることが分かりました。でも、私は周りの人にカミングアウトすることはた

められました。ただの言い訳だと思われる気がして怖かったです。そんな時にお母さんは私に寄り添ってくれました。

「学校の先生や部活のコーチにはお母さんが説明する。何でも協力するからね。でも友だちには自分で伝えてね。絶対大丈夫だから。」「何でも協力する。」「大丈夫。」という言葉に安心と勇気をもたえ、私は友だちにカミングアウトすることを決断しました。伝えたのは部活が同じ五人の親友で日頃から私が話を聞いていないと一番感じているであろう人たちです。緊張でうまく話せなかったと思いますが真剣に、でも緊張を解いてくれるような明るい雰囲気聞いてくれました。「そーゆーことか！笑。」「全然気にしてないで！」こんな風に言って受け入れてくれたのが何よりも嬉しかったし、安心しました。そんな私たち六人の部活のバスケットボールから得られた何でも言える仲の良い関係にすごく感謝しました。だからこそ自分の欠点に思える耳のことについて話せたんだと思います。欠点といっても自分を「障がい者」とは捉えません。「APD」も障害といえば障害ですが、それは私という一人の人間の特徵に過ぎないのです。○が好き、○○が苦手と同じように、私のプロフィールのたったの一部だとか思っています。○が重く捉えるより明るく捉えた方が、つらいこともあるけどポジティブに物事を考えて生きられるし楽しいです。周りと比べることもつらくなるので、私はしません。

何度も聞きかえして諦められること、ひどい聞き間違いをすることは今でもたくさんあるし、

変わりません。でも昔と変わったことは、自分の特徴を周知してもらっていることです。教室での席を前にしてもらったり、親友五人にしか伝えていませんがその五人にたすけてもらったりしてくれています。自分自身が「APD」という特徴に気づけたことがなければ、きっと今も苦しんでいるしこの作文も書いていません。私が知れて周りが知ってくれて本当に良かったと思います。私の耳とは一生付き合っていくことになるので、環境が変わっても自分なりに工夫して生活していききたいです。この経験があるからこそ、私が支える側になったときにお母さんがしてくれたように寄り添い、先生や友だちがしてくれたように助けていききたいです。私私が好きです。特徴を受け入れてくれる人がいたから、私も受け入れることができました。好きになれたのは大変なこともあるけど、耳がきっかけと言ってもいいかもしれませぬ。多少は感謝しています。

このことはプロフィールの「苦手なこと」の欄に書いておこう。
私が私でよかった。

○三重県大会 優秀賞（三重テレビ放送賞）

認知症のおじいちゃん

四日市市立山手中学校 二年

石川 凜

「じいちゃん、自転車乗ったらあかんよ。」
私は、少し強めの口調で言った。

とても仕事に熱心で真面目だった私の祖父。退職してからも自治会の役員をしたりして、地域活動にも一生懸命だった。しかし、二年程前からぼーっとすることが増え、言ったことをすぐ忘れてしまったり、会話が成立しなかったりすることが多くなった。また、一人自転車で乗って外出した時にこけたり、帰り道が分からなくなったりするようになって、祖母に電話するといふ事がおきるようになった。祖父の行動に対する不安なことが増えていったので、病院に連れて行こうとした。しかし、祖父は自分の身体に悪いところはないといい、病院に行こうとしなかった。

ある日、母が祖父の車に傷がついているのを見つけ、詳しい事を聞いても祖父はどこで傷をつけたのか全く覚えていなかった。このままでは、大きな事故を起こしてしまうと思ったので、みんなで説得して病院へ連れていった。詳しい検査の結果、「認知症」と診断された。また、医師は車の運転は絶対してはいけないと言った。祖父は静かに聞いてうなずいていたが、家に帰るとなぜ車に乗ってはいけないのか、と祖母に訴えていた。何度も聞いていたので強い口調で、祖母や母が説明していた。車だけでなく、自転車でも外出した時に帰り道が分からなくなるような心配もあったので、自転車にも乗らないようにすることにして、私も少し強めに言った。みんなに言われて、祖父は何も言わなくなったが、納得のいっていない表情だった。

このような日々が続き、祖父の症状も少しずつ進んでいるように思えた。なので、家族で今後の事を話し合うことにした。最初は施設に入れるようにしようとしていたが、結局施設に入れることはやめることにした。なぜなら、祖父が昔、ずっと家に居たいと言っていたからだ。その言葉を思い出し、認知症と診断されてから今日まで、祖父に対する接し方を思い返した。すると祖父にいろいろなことを制限するように言っていた事に気づいた。車に乗って買い物に行くことや、自転車に乗って一人で自由に外出することだって、祖父はほんとはやりたいと思う。しかし、祖父の安全を考えると制限をした方がよかったので、全て制限をしていた。他にもパソコンを使うことも制限したり、飲むお酒の量を減らしたりした。パソコンは使い方がわから

なくなっていたので、何度も使い方を聞いてくることに疲れたからだだった。「認知症だから」と言って、全て取り上げていいのかと話し合い、病院で渡されたパンフレットやチラシを確認した。そこで地域のケアマネジャーという役割の人がいることを知り、相談する事にした。

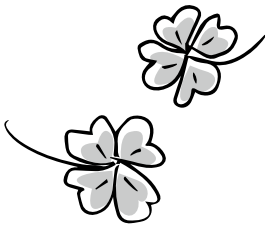
私は地域のケアマネジャーの存在も、さらに認知症患者に対する地域の取り組みも全く知らなかった。手元にあるパンフレットを読んで、できる限り情報を集めようと思った。

さらに、認知症について詳しく調べてみることにした。祖父が診断されたアルツハイマー型認知症は、過去の出来事はよく覚えていて最近の出来事は忘れてしまい、自分が何かを忘れていたことも自覚できないという症状がでる。祖父が昔の話をよく覚えているのは認知症の症状ということが分かった。その一方で、最近の出来事を忘れてしまい、思い出せなくなるという症状は、その出来事に対し、「それは違う。」という否定的なことを言うと、余計イライラして怒りっぽくなってしまおうのでお互いに嫌な思いをする。そういう場合は、違う話題に変えて気をそらしたりするとよいと分かり、すぐに実践しようと思った。

今現在、祖父の笑顔は増えた。それは、ケアマネジャーに相談した結果、日帰りで介護施設を利用できる「デイケア」を週に二日程利用しているから。その施設で、祖父は運動をしたり、ゲームをしたりしている。しかも認知症の患者専用の施設なので、スタッフの方も認知症を理解して接してくれていて、居心地が良いと言っていた。また、家族みんなで祖父を支え、接し

方も寄り添うようにしたことによって祖父だけでなく家族全員の笑顔が増えた。祖父と接していく中で大変な時もある。でも、家族全員が笑顔でいられて楽しいので、大変でも頑張ることが出来る。これからも、祖父の笑顔を家族で守っていきたいと思う。

今の日本では高齢化が進み、認知症は五人に一人の割合で発症している。私は、認知症などの高齢者の人権問題も重要視していかないといけないと思う。一人一人が、認知症などの立場にある人のことを理解し、受け入れられるようにする。また、一人で抱え込まず、みんなで支え合いながらその人と接していくことが大切だと思う。相手のことを理解し、受け入れるということは様々な立場の人の人権を守り、みんなが安心して過ごせるような社会に繋がっていくと思う。



だれもが安心して過ごせる世の中にするために

津市立久居東中学校 一年

稲垣 舞

私には、重度の障がいを持っているお姉ちゃんがいる。生まれつき脳性麻痺で歩けない。だから、移動するときには車イスを使っている。また、自分のことはほとんどできないため、家では家族が協力してお世話をしている。私も、ご飯を食べさせたり、オムツをかえたり、お風呂に入れる手伝いをしたりしている。お姉ちゃんのお世話をすることは、好きだけど、何かしているときに頼まれると面倒くさいなと思うときもある。小学校一年生ぐらいのときは、障がいを持ってないお姉ちゃんだったらよかったのに、と思ったこともある。でも、今はお姉ちゃんなのに、妹みたいにかわいくて私のいやしだ。お姉ちゃんは、笑って側にいてくれるだけでいいと思うようになった。

そんなお姉ちゃんのことを、私はみんなに知ってもらいたいと思っている。でも、みんなに

お姉ちゃんのことを話すのは言いにくいし、恥ずかしい。なぜ私はお姉ちゃんのが好きなのに、恥ずかしいと思うんだろう。

この前、部活の先輩にお姉ちゃんはいるけどこの学校にはいないことを話すと、

「じゃあ、私立の中学校にいる?。」

と聞かれた。お姉ちゃんは、城山特別支援学校に通っていて障がいを持っていると言いたかったけど、言えなかった。みんながお姉ちゃんのことをどう思うか不安だったからだ。

私は日頃から、人にどう思われているか、どう見られているかを気にしてしまう。だから、お姉ちゃんのことでもどう思われるのか気にしてしまうのだと思う。

実際、お姉ちゃんと外に出かけると、人からジロジロ見られることが多い。お父さんとお母さんは平気そうだけど、私はそんなふうに見られるのが嫌だ。そうするとお母さんは、「あんちゃんに関心があるから見るんやに。今までそういう人に関わったことがないからじゃない? それよりも無視されるほうが悲しくない?」

と言った。それを聞いて私はその通りだと思った。その時、私は車屋さんに行ったときのことを思い出した。お姉ちゃんが店員さんに話しかけているのに、その店員さんは、お姉ちゃんの方を全く見ないで無視をしていた。私はその様子を見て悲しかった。どうして無視をしたかは本当のところは分からないけど、それはきつと、身近に障がいを持った人がいないから、どう

接したらいいか分からなかったんだと思った。そういう人には、お姉ちゃんのような障がいを持っていてる人のことを知ってほしい。

もし、その店員さんが小さい頃から、お姉ちゃんのような障がいを持っている人と一緒に過ごしてきたり、接してきたりしたら、きっとお姉ちゃんに対する態度は違っただろう。

知らないということは、人を差別してしまうことにつながると思う。実際に私もそののことを何も知らなかったら差別の目で見てしまうかもしれない。いじめや差別は、相手のことをよく知らないから、起こるのだと思う。そのいじめや差別をなくすためには、相手のことをよく知ることが大切だ。

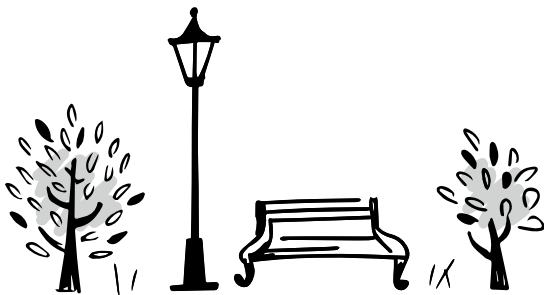
そう考えると、私はお姉ちゃんのことをみんなに知ってもらうために、聞かれたら伝えられるようになりたい。

でも、私の中にはまだまだ人の目を気にする自分がいる。人は一人一人違って、個性があって当たり前なのに、みんなと同じじゃないと嫌だと思ってしまう。安心できないのだ。

けれども、人の目を気にするということは、自分の本当の気持ちを言えなかったり、周りに合わせてしまったりして、知らないうちに人を傷つけてしまっているかもしれない。それは、お姉ちゃんのことでも悲しませてしまっているかもしれない。

私は大好きなお姉ちゃんのことを傷つけない。お姉ちゃんだけでなく、だれのことでも傷

つげたくない。そのためには、人の目を気にしすぎて行動できない自分を変えたい。まず、自分が変わることが、お姉ちゃんも家族もだれもが安心して過ごしやすい世の中になる一歩になったらいい。



おじさんから学んだ事

伊勢市立城田中学校 一年

念 佛 幸志郎

僕には、身体障害者のおじさんがいます。おじさんの仕事は、一等航海士で船の運転手をしています。僕が小学一年生の時に、船をロープで固定する時に使用する機械に、左うでが巻き込まれてしまい、左ひじから下を失ってしまいました。

僕は、小さい頃からおじさんによく懐いていたと両親から聞かされていました。そして、父とおじさんと祖父で川遊びに行っていたそうです。その頃の記憶は、うっすらとですが覚えており、おじさんの左うでではまだありました。おじさんは泳ぐのが上手で、僕に泳ぎ方や潜り方を教えてくれました。また、僕が岩から川に飛び込む時にも、おぼれないように助けてくれました。

そんなおじさんが三年程前に、左うでを失ってから初めて一緒に川へ行きました。おじさん

の子供二人を連れて行くので、安全のためにと、僕の父と母が付き添いました。おじさんは、泳いでいる時左うでが無いためバランスが取れずに、沈みそうになっていました。おじさんは「バランスが取れへん。」と笑って言っていました。なぜなら、僕に泳ぎ方を教えてくれたおじさんが、今となつては自分の体を浮かすのだけでも精一杯になっていたからです。

僕は、そんなおじさんがとても心配になってしまいました。今まで出来ていた事が出来なくなつてしまつていて、きつと、普段の生活でも奥さんに手伝ってもらつているのだろうと思つたからです。そんな状態で、「手の掛かる子供の世話をきちんと出来るのか。」「この先、おじさんは大丈夫なのだろうか。」と感じてしまいました。

だから僕は、おじさん家族が遊びに来た時には、率先して荷物を運んだり、食事を運んだりしていました。それが、おじさんにとって助けになると思つたからです。しかし、僕の父は、おじさんの子供達の遊び相手はするけれど、おじさんの事はあまり助けません。「兄弟の仲が悪かつたのかな。」と思ひました。そんなある日、僕は父に「なぜ、左うでを失つてしまい不自由なのに、助けてあげないのか。」と聞いた事がありました。すると父は、「あいつ自分の事は、自分で出来るやろ。」と言ひました。僕は、父の反応にハツとしました。なぜならおじさんは、年々出来る事を増やしていた事を思ひ出したからです。左うでを失つてしまつたばかりで、無いは

ずの左うでの痛みと戦っていた頃は、歩く時のバランスをとる事が出来ずに、転倒しそうになっていました。しかし今は、普通に歩けています。他にも、車の運転をするための補助装置を付ける事によって、片うでだけで運転する事が出来ています。うでを失った当初は、奥さんの運転で移動していましたが、今はおじさんの運転で、遠い所から祖母の家へ遊びに来ています。

おじさんは、ある程度の事は一人でできますが、本当に助けてほしい時や、手伝ってほしい時は、自分から言っていました。子供達を川遊びに連れていく時に、僕の父と母に付き添いをお願いしていたのは、自分一人では危険だとおじさん自身が判断したからなんだと分かり、僕がおじさんのためだと思ってやっていた事は、自己満足だったのではないかと感じるようになります。障害を持っているからと、何でも先回りして手助けする事は「どうせ出来ないだろう。」という思いがあり、障害を持つ人を下に見ている事だと気付かされました。

助けが必要なのは、決して身体障害者だけではありません。例えば、若い時みたいに自由に動けない高齢者だったり、力が弱い子供もそうだし、僕自身だって、出来ない事があるから大人の手助けが必要な時があります。障害があろうがなかろうが関係ないのです。

僕はおじさんから、助け合いは大切な事だけど、自己満足ではダメなんだと学びました。相手が本当に助けが必要な時に、いつでも手を差し伸べられる用意があることを、示しておくことが必要なんだと思いました。これから先、助けが必要な人を助けられるような人でありたい

と思いました。



○三重県大会 優秀賞（伊勢新聞社賞）

0歳0カ月0日

志摩市立磯部中学校 二年

坂本逢太

今年の夏休みに、お母さんが元気な男の子を出産しました。僕に二人目の弟ができました。小学校四年生になる弟が産まれた時の記憶は全然ありません。だけど今回はお母さんのお腹がどんどん大きくなっていったって、生まれてくる赤ちゃんの話をしたり、名前を考えたり早く会いたいと思っていったから「生まれたよ」と聞いた時はとても嬉しかったし涙が出ました。それくらい新しい命の誕生を家族みんなで喜びました。そんな僕はこの夏休みに命について考えるある言葉を知りました。その言葉は「0歳0カ月0日」という言葉でした。

夏休みに入っすぐ、弟がまだ生まれてない時、テレビのニュースで児童虐待のニュースが流れました。僕はお母さんと一緒にそのニュースを見ていました。ニュースでは児童虐待によって死に至るケースが一番多いのが「0歳0カ月0日」の赤ちゃんであると説明していました。最

初言っている意味が分からなかったです。虐待という言葉は聞いたことがあります。小さい子どもが親に虐待をされて命を落とすニュースも聞いたこともあったけど、「0歳0カ月0日」とはどういうことだろうと僕は思いました。ニュースを見た後でお母さんが説明をしてくれて、その意味を理解できとても驚きました。虐待死の四割は0歳の赤ちゃんで、0歳のうち約半数が0カ月で、0カ月の赤ちゃんの八十五%が生まれたその日に殺されてしまうということを知りました。しかも加害者の九割が、その子のお母さん。産まれてきてすぐに、産みの親によって命を奪われてしまう赤ちゃんがいることにとってもショックを受けました。そして嫌な気持ちと赤ちゃんの命を奪った母親に対して腹がたちました。

そのニュースを知ってから、僕は時々赤ちゃんの虐待死のことを考えるようになりました。ある日お昼にお母さんとその話をしました。僕が自分の産んだ子を死なせてしまう母親に腹が立つことを話しているとお母さんが「母親も辛かったと思うし、一人で誰にも相談できずに悩んでいたんだろうね」と言いました。お母さんの言葉を聞いて僕はその通りかもしれないと気がついて、虐待死をさせた母親の残酷で最低で無責任な部分しか報道しないニュースも間違っているのじゃないかと感じました。もつと周りが優しい社会だったら、信頼できて相談できる人が母親の周りにいたら、虐待死をする赤ちゃんは減ると思いました。悩んでいる人や辛い目に合っている人を支えていき、声を掛け合っていく社会が大切だと僕は思いました。そして虐待

死を伝えるニュースがそうだったことも伝えてほしいと思いました。

「0歳0カ月0日」という言葉を知って、夏休みにインターネットで赤ちゃんについて調べることが増えました。熊本の「赤ちゃんポスト」についても知る事ができました。日本で、赤ちゃんポストは一か所しかありません。十七年前に初めて熊本の慈恵病院に設置されたあと、増えることがなくここにしかないのは命に対する様々な意見があるからだと思います。赤ちゃんポストの正式名称は「こうのとりゆりかご」で「ゆりかご」によって実際に救われた命が一七九人あると聞き、僕は「ゆりかご」のような場所が日本で増えてほしいと思いました。でも反対する意見も多いみたいです。そういったことを夏休みに調べたりしていたので、余計に弟が生まれたことを嬉しく感じたのだと思います。

僕は新しく生まれた命を大切にしようと思ったし、弟には絶対優しくしようと思いました。そして学校では誰かの相談に乗ったり、悩んでいる人に声をかけたりして、一人で悩む人がいないクラスにしたいと思いました。多くの人が自分の生活する場所での周りの人のことを気にかけながら生活をしていけたら、助かる命は増えるんじゃないかと思います。

家族が増えた今年の夏休みは命について考えることができて、とても貴重な夏休みになりました。



《奨励賞》（九編・順不同）

題名	学校名	学年	氏名
理解する大切さ	熊野市立新鹿中学校	二年	小林里愛
温かい世界へ	松阪市立西中学校	三年	森彩乃
対等な立場への第一歩	松阪市立三雲中学校	一年	ワイリー 仁冨
差別のない世の中を目指して	桑名市立陵成中学校	三年	高橋 柚衣
女性問題について	伊勢市立城田中学校	二年	竹内 彩心
お兄ちゃんが教えてくれたこと	いなべ市立北勢中学校	三年	森脇 心花
一人一人がもつ、この世界に生きる権利	熊野市立木本中学校	二年	畑野 美織
あたりまえ	伊賀市立城東中学校	一年	佐藤 弘隆
バリアフリーとユニバーサルデザイン	大台町立宮川中学校	二年	浦中 杏

第43回全国中学生人権作文コンテスト 三重県大会表彰式



中学生用

こどもの人権 SOS ミニレター

悩んでいるあなたへ。
その悩み、私たちに相談していませんか？

相談内容の秘密は守ります。

「こどもの人権SOSミニレター」について

このミニレターに相談したいことを書いて送ってください。秘密を守ります。あなたの悩みを聞いてあげようと思います。必要に応じて、電話でもお話しできます。お話を聞いてあげようと思います。お話を聞いてあげようと思います。

こどもの人権SOSミニレター

LINEでも相談ができます。

LINE@人権相談

お電話でも相談できます。

SOSミニレター

こどもの人権SOSミニレター

SOSミニレターの他に、「電話」、「メール」、「LINE」で相談することもできます。

相談センター
TEL. **0120-007-110**

相談時間 午前9時～午後5時 休日は0～午後1時

メール相談
お話を聞かせてください。

こどもの人権SOSミニレター

LINEでも相談ができます。

LINE@人権相談

お電話でも相談できます。

SOSミニレター

相談内容

相談したいことを書いてください。秘密を守ります。

相談したいことを書いてください。秘密を守ります。

相談したいことを書いてください。秘密を守ります。

相談者の個人情報

名前

性別 男 女

学年

住所

相談内容

通学 家庭内 その他

相談したいことを書いてください。秘密を守ります。

相談センター

TEL. **0120-007-110**

相談時間 午前9時～午後5時 休日は0～午後1時

こどもの人権SOSミニレター

電話では話しにくい、勇気がいるといった子どもたちの気持ちに配慮した手紙による人権相談が、「こどもの人権SOSミニレター（便せん兼封筒）」です。津地方法務局と三重県人権擁護委員連合会では、このミニレターを三重県内すべての小・中学校の皆さんに配布しています。

子どもたちに学校内、家庭内や日常生活において抱えている様々な悩みごとを手紙に書いてもらうことで、人権擁護機関がその問題を把握し、保護者、学校や関係機関と連携を図りながら、子どもをめぐる様々な人権問題の解決に取り組んでいます。



いじめられている…



インターネット上の
トラブルに
巻き込まれた…



学校や家族、宗教、
その他のことで
悩みがある…



人権イメージキャラクター
人KENまもる君

悩みがあったら 相談してね!



人権イメージキャラクター
人KENあゆみちゃん

秘密は守るよ! 法務局で相談を受け付けています!

電話で相談

通話無料



こどもの人権 110番

フリーダイヤル 0120-007-110

相談時間 月曜日～金曜日 午前8:30～午後5:15

LINEで相談



LINEじんけん相談



▶ 友だち追加して相談してね!

ミニレターで相談



SOSミニレターでも相談できるよ!
すぐにほしい人は、
0120-007-110 に電話してね!!

メールで相談

インターネットでも相談を受け付けているよ!



こちらからも
アクセス
できるよ!▶



法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会



人権啓発キャッチコピー ～「誰か」のことじゃない。～

法務局と人権擁護委員は国民の皆さん一人一人の人権意識を高め、人権への理解を深められるように様々な人権啓発活動を行っています。

こどもの
人権教室



人権イメージキャラクター
人KENまる君

人KENあゆみちゃん

人権の花
運動

大人の
人権教室

全国中学生人権
作文コンテスト

公式SNSに
よる情報発信

人権啓発
動画の公開

人権啓発冊子
の作成・配布



法務省HP



YouTube



X



Facebook



LINE

人権相談キャッチコピー ～なんでもおしえて ところのもやもや～

法務局と人権擁護委員は、人権侵害による被害を受けた方を救済する活動を行っています。

人権教室の申込みや人権相談に関するお問合せはお近くの法務局までご連絡ください。

津地方法務局人権擁護課
津地方法務局四日市支局
津地方法務局伊勢支局
津地方法務局松阪支局
津地方法務局桑名支局
津地方法務局伊賀支局
津地方法務局熊野支局

連絡先はこちら
津地方法務局ホームページ



◆ 無断転載を禁じます ◆

本作文集の作品を地方自治体が広報誌に掲載される、学校が教材等に使用される等の場合には、あらかじめ下記に御連絡ください。

津地方法務局人権擁護課 TEL 059 - 228 - 4193

〒514-8503 津市丸之内26番8号（津合同庁舎）



人権イメージキャラクター
人KENまもる君



人権イメージキャラクター
人KENあゆみちゃん